

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月18日現在

機関番号：16101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16871

研究課題名(和文) 集落分析からみた朝鮮半島南部無文土器社会の環境適応過程の研究

研究課題名(英文) Study of the environmental adaptation process of the Mumun Pottery society in the southern part of Korean Peninsula from settlement analysis

研究代表者

端野 晋平 (HASHINO, Shinpei)

徳島大学・埋蔵文化財調査室・准教授

研究者番号：40525458

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、朝鮮半島南部においての水稻農耕導入期前後にあたる無文土器時代の集落遺跡の分析を通して、この地域の人間集団が外部環境の変動に対していかなる社会戦略をとり、結果として日本列島に水稻農耕をもたらすことになったのかを解明することである。筆者はこれまで朝鮮半島から日本列島への水稻農耕伝播のメカニズムの解明を試みてきたが、外部環境に対する人間集団の適応という観点からの、考古学的事象を通じた検証作業が不十分であった。そこで本研究では、朝鮮半島無文土器時代集落遺跡の基礎データベースを構築しつつ、個々の遺跡に関する情報の整理、気候変動・自然災害に対する人間集団の適応に関するモデル化を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、これまでの水稻農耕伝播論・開始論とは異なり、人間集団が残した活動痕跡の総体である遺跡の分析を通じて、彼らの外部環境への適応という観点から、仮説の検証を行おうとした点にある。また、文献記録や民族考古学からの情報にもとづいて、考え得る限りの仮説を構築したり、GISなどの地理学的方法や多変量解析などの統計学的方法を積極的に用いたりしている点が、独創的な点といえる。本研究がもたらす成果は、人間集団の移動や文化変化、農耕の開始を扱っている点で、考古学だけでなく、文化人類学、自然人類学といった学問分野にも大きな影響を与えるものと期待される。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify what kind of social strategy did the human group get to the fluctuation of external environment, and why was a paddy rice agriculture brought to Japan as a result by analyzing the settlement in the Mumun Pottery Period, that is the paddy field agriculture beginning period, of the southern part of Korean Peninsula. The author had tried explication of the mechanism of paddy field agriculture diffusion to Japanese Archipelago from Korean Peninsula up to now. But inspection through archaeological phenomenon from the point of view of the adaptation of human group to external environment was insufficient. Therefore, the author tried to arrange the archaeological site information and model the human group adaptation to climate change and natural disaster, building basic data base in the period of southern part of Korean Peninsula.

研究分野：日韓考古学

キーワード：集落 環境適応 朝鮮半島南部 無文土器時代 水稻農耕 気候変動 自然災害

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

今日、紀元前5世紀かそれ以前にさかのぼる時期に日本列島で開始される水稲農耕の起源が朝鮮半島南部に求められるのは間違いない。ところが、なにゆえ水稲農耕が半島から列島へと伝播したのかについては、考古学的事象を通じて十分に解明できていなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、水稲農耕導入前後における朝鮮半島南部の人間集団が、いかなる社会戦略を採り、結果として日本列島に水稲農耕をもたらすことになったのかを解明することである。

3. 研究の方法

(1) 無文土器時代集落遺跡の基礎データベースの構築

無文土器時代遺跡の発掘調査報告書から得られた情報を収集・整理し、それに遺跡を実際に踏査して得られたデータを追加することによって、集落遺跡の基礎データベースを構築する。あわせて、時間軸の指標となる土器編年について検討する。

(2) GISによる遺跡分布の検討

(1)で構築したデータベースをもとに、遺跡の分布を検討する。

(3) 外部環境に対する人間集団の適応とその痕跡の類型化

気候変動に対する世界各地の人間行動に関する文献記録とそれに関する研究成果、集団内・間の社会関係が物質文化にいかん表れるのかを研究した民族考古学の成果を調べる。これによって、自然環境・社会環境双方の変化に対して、人間集団がいかにして適応したのか、そして、それは考古学的にはいかなる痕跡として把握されるのか、あるいは把握されないのかを類型化を試みる。

4. 研究成果

本研究ではまず、朝鮮半島無文土器時代集落遺跡の基礎データベースの構築を行った。具体的には、申請者がこれまで収集した報告書や、所属機関である徳島大学埋蔵文化財調査室が契約を結んでいるデジタルアーカイブ『韓国歴史文化調査資料データベース』(ZININZIN社)から情報を収集し、遺跡に関する情報を整理した。つづいて、構築したデータベースをもとに、ArcGISを用いて、遺跡の分布図を作成した。これらの作業にあわせて、集落分析の土台となる土器編年を検討した。対象とした地域は、列島に水稲農耕をもたらした渡来人の故地と推定される嶺南地方西部である。結果として、無文土器時代早期～後期前半を六期に区分した。また、文献史料や遺跡に残された気候変動、自然災害に関する研究成果を収集・整理し、人間集団の環境に対する適応のあり方についてのモデル化しようとした。

以上の結果の一部と、これまで研究成果をまとめ、一冊の研究書を刊行した。同書においては、朝鮮半島から日本列島への水稲農耕伝播のメカニズムに関するモデルをあらためて提出した。それは次の通りである。すなわち、730 cal BC ごろからの寒冷期の開始と時を同じくして、渡来第1段階が始まった。この寒冷化に遠因する半島南部から列島への人口拡散の結果として、半島・列島間を横断するネットワークが形成された。つづいて、渡来第2段階は600 cal BC ごろから始まるが、この段階になると、気候は温暖化し、これにともない洪水リスクが高まった。洪水による農作物の被害や農地の喪失が渡来の要因となった。こうした自然災害を要因とする生産力の低下は、集落内における人口圧の増大を招いた。これに対して無文土器社会は、より積極的に人口の拡散によって解決を図ろうとした。そうした人口拡散の一部が既存のネットワークを介して、列島に渡来した、というものである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

端野晋平、庄・蔵本遺跡一帯における弥生時代前期墓制の検討、庄・蔵本遺跡3 - ボイラータンク地点(1998年度立会)・第22・30次調査地点 -、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、pp.91-116、2018年3月、査読無

端野晋平、墓制からみた弥生時代の始まり - 徳島地域をケースとして -、地方史研究、第67巻第4号(388)、地方史研究協議会、東京、4-8、2017年8月、査読無

端野晋平、板付式成立前後の壺形土器 - 分類と編年の検討 -、考古学は科学か 田中良之先生追悼論文集、中国書店、福岡、325-349、2016年5月、査読無

端野晋平、水稲農耕開始前後の日本列島・韓半島間交流、石堂論叢、第64集、東亜大学校石堂学術院、釜山、33-63、2016年3月、査読有

端野晋平、考古学における気候変動論の検討 - 日本列島・朝鮮半島の水稲農耕開始前後を対象として -、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要2、国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室、徳島、25-36、2016年3月、査読無

端野晋平、近年の弥生時代開始期墓制論の検討、古文化談叢、第74集、九州古文化研究会、北九州、95-129、2015年8月、査読有

[学会発表](計7件)

端野晋平、弥生時代前期墓制の検討 徳島市庄・蔵本遺跡一帯を中心として、平成30

年度九州史学会大会考古学部会、九州大学、2018年12月9日

中村 豊・端野晋平・三阪一徳・河原崎貴光、縄文/弥生移行期の集落について - 徳島市三谷遺跡の調査から -、日本考古学協会第84回総会、明治大学、2018年5月27日

端野晋平、支石墓の系譜と受容、唐津松浦墳墓群国史跡指定記念シンポジウム 未慮国の自叙伝、ひれふりランド、2017年3月18日

中村 豊・中沢道彦・山城考・端野晋平・那須浩郎、徳島市三谷遺跡の発掘調査-雑穀農耕開始期の遺跡調査-、雑穀研究会、農研機構、2016年8月22・23日

三阪一徳・脇山佳奈・端野晋平、庄・蔵本遺跡における弥生時代前期水田の調査成果、考古フォーラム蔵本2月例会、徳島大学埋蔵文化財調査室、2016年2月26日

端野晋平、水稻農耕開始前後の日本列島・韓半島間交流、石堂学院第10回国際学術大会「東アジア地域社会の知識情報交流と流通」、韓国・東亜大学校富民キャンパス総合講義棟BC-0115、2015年11月27日

端野晋平、弥生時代開始期墓制論の諸問題、考古フォーラム蔵本5月例会、徳島大学埋蔵文化財調査室、2015年5月29日

〔図書〕(計1件)

端野晋平、初期稲作文化と渡来人 - そのルーツを探る -、すいれん舎、東京、A5版561頁、2018年5月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：中村 豊

ローマ字氏名：(NAKAMURA, Yutaka)

研究協力者氏名：三阪 一徳

ローマ字氏名：(MISAKA, Kazunori)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。